

(注) 解答はすべて解答用紙の指定された箇所記入しなさい。

一 次の文章を読んで設問に答えなさい。

私たちは「同じ名前がつく同じ種類のモノ同士」を「同じ」であると考え。しかし、同時に、ネコ二匹もチワワも、ともにホニユウ動物なので、何らかの同じ特性を共有しているはずだとも考えるのである。

幼児も私たちと同じように考えるのだろうか。例えば、三歳から五歳くらいの子どもにウシの絵を見せるとしよう。続いて、ブタの絵とミルクの絵を見せる。そして、子どもに「これ(ウシ)と同じ種類なのはどっち?」と聞く。すると、子どもは多くの場合、ミルクの絵が「同じ種類」だと言う。ウサギの絵を見せて、同じなのはどっち、と聞き、ニンジンとネコの絵を見せる場合にも、ニンジンを選ぶ子のほうが多い。子どもはもともウシとミルク、ウサギとニンジン、サルとバナナ、というような連想関係にあるモノ同士を仲間と考え、「同じ」であると言う傾向が強い。

しかし、例えば、「怪獣語ではウシのことをネケと言うんだよ」と子どもに教え、ブタとミルクの絵を見せて、「どっちがネケ?」と尋ねるとする。すると、「同じ種類のモノ」を選んで、と言われたときはミルクを選んでいたのに、同じ年齢の子どもが、こんどはブタを選ぶのだ。

子どもにとって、ウシとミルク、サルとバナナのような連想関係はとても魅力的である。1、単に「同じのはどっち?」と聞かれると、連想関係にあるモノを選ぶ。しかし、ラベルに関しては、ウシとブタのような、同じカテゴリーに属するモノが同じラベルを共有する、と考え、サルとバナナのような連想関係にあるモノ同士は、同じラベルを共有しないはずだ、

と考えているのである。

私たちは世界を様々にくくり、分類していくことができる。食べ物、道具、食器、植物、動物などのように概念を階層的に整理して分類することもできるが、「赤いもの」、「丸いもの」、「丸い形をしたもの」のように、ある特徴によって分類することもできる。あるいはウシとミルクのように因果関係、サルとバナナのように連想関係で、モノ同士をまとめていくことも可能だ。

このように、いろいろな基準でいろいろな分類が可能で、大人は「同じ種類」と言われると、ウシとブタのような同じ概念カテゴリーに基づくモノ同士が「同じ種類」だと考える。それに対して、子どもは、モノ同士の関係のあり方として、因果関係、連想関係、同じ属性を持つ関係、同じ材質からできている関係など、様々な基準での「同じ」が存在することに早くから気づいているのだが、どの「同じ」をいつ使うべきなのがわからないのだ。しかし、ことばの存在により、ことば(名詞)によってラベルづけされる分類の仕方、つまり概念カテゴリーに従った分類が特別な分類だ、^bということを経験的に学んだとしよう。

だが、考えてみると、2、名詞によってラベルづけされる分類の仕方が、なぜ特別なのだろうか。これを考えるために、例えば「植物」に属するモノたち、「サルとサルの好きなモノ」たちと「赤いモノ」たちをそれぞれ考えてみよう。その中で、お互い同士の共通性に最も意味があるのはどれだろうか。

例えば、ある植物の根には○^a○という、有毒の物質が含まれている、ということを経験的に学んだとしよう。3、人は、その植物自体を食べないように気をつけるだけでなく、それと「同じ種類」のモノも避けたほうがよい、と考える。では「同じ種類」は何を手がかりに探したらよいのだろうか。その植物の花と同じ色のモノすべてなのか、その植物に寄生する虫なのか、それともその植物と同じカテゴリーに属する植物なのか。このように、ある特定のモノにある属性があるとき、その同じ

属性が他のモノにも共有されているかどうか推論することを「帰納推論」という。人の思考の中で、帰納推論はもともと重要で、もともと⁽²⁾ヒンパンに行われるものである。私たちはあるモノの属性が、それと「似たモノ」あるいは「同じ種類のモノ」と共有される可能性が高いと考え、直接経験しなくても、モノの属性について推論し、予測するのである。

帰納推論は、知識も経験も大人に比べて少ない幼児にとって、とりわけ重要である。しかし、知識が少ない子どもにとって、「同じ種類」のモノを決めることは容易ではない。「同じ」というのはアイマイで、⁽³⁾いろいろな基準で、様々な「同じ」が可能だからだ。しかし、ラベルを持つのは概念カテゴリーで、「赤いモノ」「サルとサルの好きなモノ」のようなカテゴリーは通常、単語のラベルを持たない。したがって、ラベルを共有しているモノ同士は同じ属性を持つ、と考えれば、実際にモノについての経験や深い知識を持たなくても、あるモノにXという属性がある、と知れば、それと同じラベルを持つ他のモノに、その属性を帰納できる。

このように、ことばを介して、子どもは直接経験したり教わったりしていないモノにどのような属性があるかを帰納推論によって学習し、概念を構築していくのである。つまり、ことばは子どもが自分で概念を学習し、大人の持つ⁽⁴⁾を自らつくり上げていく際に、大きな役割を果たす。ことばが存在しなかったら、幼児が素早いスピードで概念を学び、効率よく概念体系をつくり上げていくことは不可能なのである。

(今井むつみ「ことばと思考」より)

問一 傍線部(1)～(3)のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) ホニユウ
- (2) ヒンパン
- (3) アイマイ

問二 空欄 1 3 に入る語句として最も適切なものを、次のア～カからそれぞれ一つずつ選びなさい。

- ア. そのかわりに
- イ. いっぱうで
- ウ. そもそも
- エ. これによると
- オ. そのとき
- カ. だから

問三 傍線部 a 「同じカテゴリーに属するモノが同じラベルを共有する」とあるが、子どもと大人の思考の仕方について筆者の考えとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

- ア. 大人は、「同じ名前がつく同じ種類のモノ同士」を「同じ」であると考えない。
- イ. 大人は、どの「同じ」をいつ使うべきなのかわからない。
- ウ. 子どもは、連想関係にあるモノ同士は、同じラベルを共有すると考える傾向が強い。
- エ. 子どもは、連想関係にあるモノ同士を仲間と考え、「同じ」であると言う傾向が強い。

問四 傍線部 b 「概念カテゴリーに従った分類が特別な分類だ」とあるが、筆者が「特別」だと述べる理由として最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

- ア. 帰納推論は、人の思考の中で、もつとも重要でもつとも稀有なものであるから。
- イ. 帰納推論は、幼児にとつても、ことばによつて分類することが可能であるから。
- ウ. 子どもは、直接経験を介して、モノの属性を帰納推論によつて概念構築していくから。
- エ. 子どもは、仲間関係にあるモノ同士は、直接経験を共有していると考えているから。

問五 空欄 4 に当てはまる語句として最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

- ア. 帰納推論
- イ. 連想関係
- ウ. 概念構造
- エ. 属性帰納

問六 子どもにとつて帰納推論がなぜ重要なのかを、本文中の語句を用いて、句読点も含め四〇字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで設問に答えなさい。

柳（注一）が考えた「民藝」とは何か、そして柳が民藝にどのようなはたらきを見出したのかを確かめてみたいと思います。まず、読み解いてみたいのは、柳による民藝運動の（1）マニフェストともいえる『工藝の道』にある一節です。

されば地と隔る器はなく、人を離るる器はない。それも吾々に役立とうとてこの世に生れた品々である。それ故用途を離れては、器の生命は失せる。また用に堪え得ずば、その意味はないであろう。そこには忠順な現世への奉仕がある。奉仕の心なき器は、器と呼べるべきではない。用途なき世界に、工藝の世界はない。（『工藝の道』）

^a 工藝の美は、奉仕の美である、すべての美しさは奉仕の心から生まれる、と語ります。柳にとって奉仕とは、原義のとおり人間というよりも神仙に仕えることにほかなりません。工藝に奉仕の心がある、と柳がいうとき、器はまず人に対する以前に、超越的存在に対して、わが身を奉じ、仕えている、という認識がある。また、真に奉仕するものは、見返りを求めない、ということも含意されている。

「奉仕の心」という言葉も、一見すると、この「心」は、工藝職人の心であるかのように思われ、作る人の心が清らかであれば、清らかな美しいものが生まれる、という風にも読める。しかし、柳はそうように短絡的には考えていません。

ここで柳がいう「心」とは、人間の心である以上に「物」の心なのです。それは、すべての「物」には心がある、という（2）アニミズムとは異なります。^b 柳は「器」は、生物とは異なるありようではあっても、「いのち」あるものだと考えている。「いのち」が宿るとき、そこに奉仕の心もまた宿る。それは彼の思索の結果ではなく、打ち消しがたい経験なのです。

宮沢賢治（注二）の作品を読むと、同質のことが描き出されているのに出会います。賢治が鉱物に「いのち」を感じていた

のは明らかです。「銀河鉄道の夜」には次のような印象的な一節があります。「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている」。賢治も砂に「いのち」を感じている。同様のことは器と柳のあいだにも起こっているのです。

「物」が「奉仕」する。ここにはおのずと「忘己利他」^cが実現する。民藝の器には主張するべき「我」がないからです。そして、どのように用いられるかを、自分以外の存在、すなわち人にゆだねているからでもある。

器による奉仕は、人に用いられることによって実現する。先に引いた『工藝の道』の言葉に「用に堪え得ずば、その意味はない」という一節がありました。

用とは「用いられる」、つまり「用い得る」ということです。「物」は、見られるだけでなく、用いられ、生活のなかに浸透していくことで、真に「いのち」を帯びたものになる。「民藝」は生まれたときに「民藝」となるものではありません。用いられることによって「1」になっていくのです。

そうした「民藝」になり得る物を柳は「2」と呼びます。そのいっぽうで、飾られ、眺められるだけのものを「美藝」と呼びました。柳は「3」を否定しません。しかし、工藝の優位を説くことも躊躇しませんでした。

一九三六年、柳宗悦は民藝運動の本拠として日本民藝館を創設します。日本民藝館にある民藝と、上野の東京国立博物館に展示されている民藝とを見比べると、その姿に決定的に違うところにすぐ気がつくと思います。

東京国立博物館には、誰も触っていない、造られたままのものが展示されています。博物館の収蔵品ですから、誰かが使うことはありません。

一方、柳の手元にあった民藝は、用いられたあとが歴然としています。事実、彼が生きている間、普通に食卓などで使っていたものもあります。

そこに顕われている美の差異は、一目瞭然です。日本民藝館には、一部が欠けたものも飾られています。民藝の場合は、古

くなればなるほど、修繕すればするほどその固有性を強くする。さらにいえば、欠けたままでも美しい^d。

あるところで柳は、わざと古く見せようとしてつけた疵^{きず}ほど醜いものはないと語っています。作られた疵は単なる破壊ですが、その一方で人々が用いることで付いた疵からは、新しい美が生まれることもある。

書物にも似たことがいえます。「本」と「書物」という言葉を使い分けて、本は書店に置かれているもの、書物は誰かに読まれたもの、と言い換えるとしたら、4 は、じつに「書物的」です。本は読まれることで書物になる。さらに同じことは料理にもいえます。それは人に食されたとき、真の意味での「糧」になる。出来上がったときがもつとも美しいなどということは全くない。用いられ、時のちからを得て、変貌し、美が深まっていくというのが民藝をめぐる柳の実感だったのです。

(伊藤亜紗編『利他』とは何か)より若松英輔「美と奉仕と利他」

(注一) 柳宗悦：一八八九(明治二十二)年～一九六一(昭和三十六)年。日本の美術評論家、宗教哲学者、思想家。民藝運動の主唱者。

(注二) 宮沢賢治：一八九六(明治二十九)年～一九三三(昭和八)年。日本の詩人、童話作家。主な作品として『銀河鉄道の夜』など。

問一 傍線部(1)、(2)の語の意味として最も適切なものを、それぞれのア～エから一つずつ選びなさい。

(1) マニフェスト

ア. 文藝書

イ. 報告書

ウ. 指示書

エ. 宣言書

(2) アニミズム

ア. 特定の動植物と特別な関係を持つと考えること

イ. 超自然的呪力の観念を基礎とする未開宗教のこと

ウ. 自然界のあらゆる事物に霊魂があると信ずること

エ. 人工物や簡単に加工した自然物に対する崇拜のこと

問二 空欄 1 4 に入る語として最も適切なものを、①「民藝」、②「工藝」、③「美藝」からそれぞれ一つずつ

選び、①～③の記号で答えなさい。

問三 傍線部 a 「工藝の美」について、本文における工藝の美と類似した美を有すると考えられるものとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

- ア. 夏休みの宿題で描いた交通安全ポスター
- イ. 空き容器となったペットボトルを再利用した一輪挿し
- ウ. 使い古した着物を細く裂いて織った着物
- エ. 大名に献上するために製作された飾り棚

問四 傍線部 b 「柳は「器」は、生物とは異なるありようではあっても、「いのち」あるものだと考えている」について、器の「いのち」のありように対する生物の「いのち」のありようについて述べた文として最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

- ア. 生物の「いのち」は、生まれたときには既にその生物に宿っている。
- イ. 生物の「いのち」は、親から子へと代々受け継がれていく。
- ウ. すべての生物の「いのち」は、生まれたら必ず死すべきものである。
- エ. すべての生物の「いのち」は、等しく至上の価値をもつ。

問五 傍線部 c 「民藝の器には主張すべき「我」がない」について、その理由を述べた文として最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

- ア. 民藝の器は、心が清らかな工藝職人によって生み出されたものであり、その「美」の源泉は、器の工藝職人に対する奉仕の心であるから。
- イ. 美そのものを表現するためにこの世に生み出された美術品の器とは異なり、民藝の器は、「忠順な現世への奉仕」のために生み出されたものであるから。
- ウ. 鉱物や本と同様に民藝の器も無生物であり、そこに「いのち」や「美」など何らかの意味を見いだそうとするのは、人間の心象に過ぎないから。
- エ. 用いられることを目的として生み出された民藝の器は、用いられ続けることによってその本質が変貌し、用いる人と一体となっていくから。

問六 傍線部 d 「さらにいえば、欠けたままでも美しい」について、民藝は欠けたままでも美しいと見なされる理由を、本文中の語句を用いて、句読点も含め四〇字以内で説明しなさい。